

日本語自然会話におけるコピュラ否定文の出現条件とその動機について

The conditions and causes of the use of negative copular sentences in natural conversations in Japanese

谷口洋志

Hiroshi Taniguchi

京都大学

Kyoto University

taniguchi.hiroshi.66r@st.kyoto-u.ac.jp

概要

本発表は、現代日本語のコピュラ否定文「-ではない (-じゃない)」「-ではありません (-じゃないです)」が、現実の発話場面に於て、いつ用いられるのかを検討するものである。コピュラ否定文の使用は、ともすると情報伝達の遅延を招き、Griceの「量の格率」に違反しうる。しかし、ある文脈・状況の中でコピュラ否定文が使われうるかどうかは、「量の格率」だけでは捉えきれず、より多様で且つ微妙な諸条件が絡んでいる。本発表は、その諸条件の内、「話し手の心内環境」に強く関与する、次の3条件を提案する。すなわち、①肯定/否定のみに関心が向いているとき、②表現や内容の心内検索が完了していないとき、③否定する箇所が聞き手と十分に共有されていないときは、相対的にコピュラ否定文が使用しやすくなる。

キーワード：否定文、量の格率、冗長性

1. はじめに

発表者は、「ある言語形式が、実際の言語使用の場面で、いつ・どのように・なぜ使われるのか」ということに興味を持っており、その言語形式(=研究対象)として、現代日本語の否定文の一形式「-ではない(-じゃない)」「-ではありません(-じゃないです)」(以下、総称して「コピュラ否定文」と呼ぶ)に注目している。ある文脈・状況の中でコピュラ否定文が使用されるか/されないかについて調べてみると、実に様々で且つ微妙な違いによって、使用される/されないが、変異することが分かる。しかし、だからといって、使用の有無が完全にランダムに変わるわけではなく、その生起環境には、一定のパターンなり動機が垣間見える。発表者は現状、話し手がコピュラ否定文を産出するかどうかは、聞き手のときには気にも留めなかったような諸要因によって決まるのではないかと予想している。

本研究は、来年以降、母語話者を対象としたアンケートを実施するなど、実証的な調査に入る予定であり、本研究は、その前準備としての性格を持っている。そのため、本発表で用いる例文に対する容認度は、全て発表者の直感による。又、実際問題として、「ある文脈・状況

でコピュラ否定文が使われるかどうか」というのは程度問題である。そこで、本発表及び本研究では、複数の例文や文脈を提示し、その間で、コピュラ否定文を使うことによる自然さの差はあるか、という相対差を扱うものとする。

2. 問題の所在と先行研究

2.1. 量の格率

一般に、「Aか?」という質問に「Aではない」と答えたり、「Bである」という知識を持ちながら、わざわざ「Aじゃなくて…」などと付け加えたりすることは、情報伝達の効率という観点で見れば、冗長であり、Griceの「量の格率」[1]に違反すると考えられる。

この点に関し、Horn (2001) [2]は、「二律背反的な2つの原則」(p. 249)によって、否定の非情報性を説明することを試みている。すなわち、原則として、話し手は、必要最小限のことだけを言って労力を最小化しようとするが、その一方で、聞き手にできるだけ多くの(十分な)情報を与えるということも目指さねばならない(pp. 246-257)。しかし、ある文脈に於て、この2つの対立する原理のどちらが優勢であるかは、「まだ決定的な解決を与えられていない」(pp. 250-251)。実際、本発表では、「2択のアンケートに答えるような状況で、コピュラ否定文が使われるかどうか」「相手の誤解を正すような状況で、コピュラ否定文が使われるかどうか」といった議論を行うが、各状況でどちらの原則が優勢なのかは、実際に1つ1つ例文を作るなどして検証しないことには分からない。それならば、こうした二元論的な見方とは一旦距離を取り、1つ1つの文脈・状況の中でコピュラ否定文が使われるかどうかを細かく観察した方がより現実に近づけるのではないかと、発表者は考えている。

2.2. 対立する肯定の想定

「否定形式が容認される環境」という点で先行研究を当たってみると、「否定には、それと対立するような肯定の想定が無いと容認されにくい」という、ある程度広く支持されている仮説も見つかる（例えば、Horn 2001[2], 王 2003[3], 吉村 1999[4]）。

しかし、「では、対立する肯定の想定さえあれば否定文は容認されるのか」と言うと、そうでもない。Horn は、「私たちは正しかった: 今朝電車は遅れなかったのである (“We were right: train wasn't late this morning.”) (p.232) という文を反証として挙げている[2]。

又、3節の「条件1」で具体的に触れるが、「対立する想定」と言っても、その内実は漠然としている。否定文の使用を予測するような、「対立想定¹の共通性質」のようなものを立てるのは不可能に思われるのである。

3. コピュラ否定文の使用と話し手の心内環境

以下では、先行文脈や話し手の心内環境に注目し、「どういうときであれば、会話の中でコピュラ否定文を問題なく使用できるのか」その条件を考える。

条件1. 聞き手に伝えるべき内容が「肯定/否定」のみだと話し手が判断したとき

(1)(2)では、疑問文とその回答に同じ表現が使われているにも関わらず、(2)の返答からはどこか違和感を覚える。その違和感とは、「聞く分にはさして問題にしないが、実際に自分で言うことはないだろう」というものである。これは、「(文法的に)言えるか/言えないか」という違いというよりは、寧ろ、「(実際の言語運用に於て)言うか/言わないか」という違いである。

(1) ((市役所にて、家族構成に関するアンケートを、Aに代わって職員が記入している))

職員: えーっと、次の質問項目ですが、息子さんは(まだ)学生(さん)ですか?

A: いえ、(もう)学生じゃないです。

(2) ((Bの家を久しぶりに訪ねたAが))

A: 息子さんは、(まだ)学生(さん)ですか?

B: #いえ、(もう)学生じゃないです。 (cf. いえ、もう社会人です。)

この差異は、2.2「対立する肯定の想定」では説明ができない。2択のアンケートを行う(1)で、「Aの息子は学生だ」という想定があるとは考えにくい(寧ろ、アンケートとはそうした事前の想定を抜きにしてデザインされているはずである)。又、(2)で、「Bの息子は学生だ」という想定があるかどうかは、かなり意見が分れる問題だろう。

そこで、話し手は「聞き手にどこまで詳細な情報を与えればよいか」をリアルタイムで推し量っていると考えると、(1)(2)の差異を説明できる。(2)の場合、Aは、Bの息子について「学生であるか/ないか」という2択以上のことを知りたいはずであり、それはBからしても容易に想像できるはずである。仮に、(2)でBが「いえ、(もう)学生じゃないです」とか「いえ、違います」とだけ言って、自分のターン(発話順番)を終えてしまったら、恐らくこの会話には暫く沈黙が流れるはずである。逆に、(1)では、「息子が学生であるか/ないか」のみが注目されており、それは、口頭でアンケートに答えているAにも分かっているはずである。このとき、職員の質問に対して、Aが、「いや、大学を中退した後、いろいろ苦勞を経て、今は私の扶養内で勤勞してまして…」などとよもやま話をするとしたら、Aはそもそも「アンケートに答える」という当該会話に適合しているとは言えず、職員を少なからず苛つかせてしまうだろう。

「どこまで詳しい情報を与えるのか」という判断は、Grice[1]の「量の格率」「関係の格率」にほぼ相当するが、今扱っている生起環境は格率だけでは捉え切れない。というのも、たとえ情報量が同一だったとしても、「肯定/否定」という区別がなかったら、コピュラ否定文が使いにくいからである。例えば、(3)の場合、客がとることのできる選択肢は、「持ち帰る」か「店内で食べる」の2択のため、コピュラ否定文による客の返答であっても、「店内で食べる」ことは明白である。しかし、伝えるべき情報は2択でしかないという点で(1)(3)は同じなのだが、この二者択一的な推論は言語的には浸透していないのか、(3)の場合はコピュラ否定文が使いにくい。

(3) ((ファストフード店で))

店員: いらっしゃいませ。お持ち帰り[テイクアウト]ですか?

客: #いえ、(お)持ち帰り[テイクアウト]じゃないです。 (cf. いえ、店内で。)

- (4) ((ファストフード店にて、店内で飲食する予定だったはずなのに、店員が誤って商品をテイクアウト用の箱に詰め始めたのを見て、客が))
あー、(お)持ち帰り[テイクアウト]じゃないです。

一方、(4)のように「相手の誤解を即座に訂正する」という状況であれば、コンピュータ否定文が使いやすくなる。これは、他のどんな情報よりも、「相手の認識(「この客はテイクアウト」)を否定する」ということに眼目が置かれるからだろう。

条件 2. 話し手が、表現や内容について、検索を行っている途中のとき

(5)に於て、Bは、Aの発話の中に棄却すべきこと(「叔父さんの車が白色」)を見出しており、しかも、Aに対して伝えるべきことは、「叔父さんの車は非白色」以上のことだとも分かっている。しかし、一発で「正解」(例えば、「叔父さんの車は鈍色」)に辿り着けない場合、表現や内容の検索作業を心内で行わなければならない。このような場合は、検索の「つなぎ」としてコンピュータ否定文が現れうる。逆に、(6)のように、話し手が、すぐに「正解」にアクセスできる場合、コンピュータ否定文は通常、現れない。

- (5) A: 叔父さんの車って白だっけ?
B: いや、白ではないよ。 あれ何色って言えばいいんだろう?
(6) A: あなたが吹いてるその楽器ってトランペットだっけ?
B: #いや、トランペットではないよ。 (cf. いや、違うよ。 / いや、トロンボーン。)

但し、こうしたコンピュータ否定文が現れたからといって、話し手の心内で実際に検索作業が行われているとは限らない。例えば、(7)(8)のBの返答は、Aの疑問に対して完璧に答えることを最早諦めており、Bが実際に心の中で「ワルピリ語」や「アルバム」に関する知識を掘り起こしているとは考えにくい。しかし、「検索作業が仮想的に行われ、それが途中でとりやめられた」と考えれば、(5)(6)と同様に(7)(8)も理解可能である。若干、セマンティックな言い方をすると、「あなたの求める『正解』に辿り着くことはなかったが、少なくともこの可能性だけは除外できる」という表現だと言える。

- (7) A: ワルピリ語ってどこの言語だっけ? アフリカとか?
B: いや、(どこかは忘れたけど,) アフリカではないよ。
(8) A: このアルバム誰の曲が入ってるの?
B: さあ? でも、君の好きな安室奈美恵ではないよ。

(5)-(8)での議論は、「現在、話し手が与えられる(不完全な)情報だけでも、聞き手にとって価値を持つか」という問題に関わっており、その意味で、これまたGriceの格率[1]に関連する。しかし、関連こそすれ、(5)-(8)のコンピュータ否定文の使用の裏にあるのは、会話の格率以前に、「話し手が『正解』に辿り着けているか」という、もっと話し手の心内の閉じた領域の問題だと思われる。その証拠に、会話場面でなくとも、上述の心内検索によって説明可能なコンピュータ否定文がある。例えば、(9)のように幼児が文節ごとに区切りながら発話をする場合や、(10)のように記憶を掘り起こしながら独り言を呟く場合は、表現や内容の検索を行わなければならないので、コンピュータ否定文が使われやすい。

- (9) 幼児: あのねー、私が吹いてるのはねー、トランペットじゃなくてえ、えっとねー…
(10) [独り言で] えーっと、Aさんが吹いてる楽器は、トランペットじゃなくて、ホルンでもなくて…

条件 3. 棄却する箇所が聞き手と十分に共有されていないと話し手が判断したとき

(11)(12)のAの発話は、統語構造や情報構造が若干異なる程度だが、(11)と比べて(12)だと、Bは、「私立じゃなくて…」と付け加えづらい。とはいえ、この差異を「主語かどうか」とか「前提か焦点か」といった単純な概念だけで説明づけるのは無理がある。というのも、両者の差は程度問題であり、実際に(12)のような発話が産出される可能性も十分に考えられるからである。

- (11) A: この前、京都工芸繊維大学っていう私立大学教えてくれたじゃん?
B: あ、あそこは、私立じゃなくて、国立だよ。
(12) A: この前教えてくれた京都工芸繊維大学って、私立大?
B: #あ[いや]、あそこは、私立じゃなくて、国立だよ。 (cf. あ、あそこは国立だよ)

そこで、本発表では、こうした程度差を扱うために、「棄却箇所¹の共有度合」というパラメータを提案する。例えば、(13)–(15)は、全て、教師の言動に対して、生徒が割り込むように訂正を加える場面だと言える。このとき、(13)や(14)のように、複数の「変数」を含むような談話や計算式に対して、教師が注目していないであろう箇所を指す（訂正する）ときは、「-じゃなくて」と加えることが、自然に行われる。逆に、(15)のように、聞き手である教師と注目箇所（「正解の記号は何か」）が一致していることが明らかな場合は、コンピュータ否定文は、寧ろ現れにくい。

(13) 教師： ドイツの首都ウィーンは、少年合唱団など音楽が有名で…

生徒：（即座に）え？先生、ドイツじゃなくて、オーストリアじゃないですか？

(14) 教師： あれっ！？（黒板に数式を書きながら途中で詰まってしまう、無言になる）

生徒：（（何かに気づいた様子で））先生、そこ、2乗じゃなくて、3乗じゃないですか？

(15) 教師： 問い3の答えは、「ア」です。

生徒： #（即座に）え？先生、「ア」じゃなくて、「イ」じゃないですか？（cf. え？「イ」じゃないですか/本当に「ア」ですか？）

「これから自分が棄却する箇所を既に聞き手と共有できているかどうか」という尺度を導入するメリットは、そこに2段階の程度差が含まれていることである。程度差を許容する尺度であれば、コンピュータ否定文の使用が、個人間や個人内で、微妙に揺れ動いている事実と符合するためである。1つ目の程度差は、ある個人の意識におけるある対象に対する注目度合である。人間の意識はどこか一点に完全に注がれているわけではない（Chafe 1994[5]など）と考えられるため、ある箇所に聞き手が注目しているかどうかは程度問題でしかない。

もう1つの程度差は、話し手による主観的な判断である。「棄却箇所¹の共有度合」は、客観的に（＝神の視点で）話し手と聞き手の間の意識の相関をとったものではなく、話し手が主観で聞き手の脳内を予想したものに過ぎない。日常生活の中で、我々は、何か文章を書いたり、まとまったスピーチをしたりするとき、直感的なレベルで、「ここまでは言わなくても分かるだろう」とか「これも一応、言っておくか」といった判断をすることがあるが、それに近い働きだと考えられる。このこ

とは、(16)のように、聞き手から「適切な (relevant)」反応が得られなかったときに、コンピュータ否定文を追加できることから分かる。

(16) A: ウィーンはオーストリアの首都だった気がするけどなあ。

B: …（沈黙）

A: いや、ドイツじゃなくてね。

B: うん。

4. まとめと考察

本発表では、会話の中でコンピュータ否定文が自然に使われうる条件として、①聞き手に伝えるべき内容が「肯定/否定」のみだと話し手が判断したとき、②話し手の心内における、表現や内容の検索が未了であるとき、③棄却する箇所が聞き手と十分に共有されていないと話し手が判断したとき、の3つを提示した。

発表者は、コンピュータ否定文の使用に纏わるこうした条件には、ある程度「動機」のようなものが存在し、決して歴史の中で偶然定着したようなものではない、と主張したい。そして、その「動機」には、話し手の心内環境が密接に関わっている。

又、こうした使用の「動機」「条件」は、結局は、話し手の主観的な判断に委ねられており、この判断は、聞き手の言語理解に則ったものとは限らない。日常生活で、「話し手は分かっているつもりだが、聞き手には伝わっていない」「必要かと思って付け加えたが、聞き手からすると冗長に聞こえる」といった現象が生じてしまう一つの要因はこれだと考えられる。

謝辞

本発表は、日本学術振興会の科学研究費補助金（基盤(S) 20H05630）の成果の一部である。

参考文献

- [1] Grice, Herbert. P. (1989), *STUDIES IN THE WAY OF WORDS*. (清塚邦彦 (訳), (1998), 論理と会話.)
- [2] Horn, Laurence. R. (2001), *A Natural History of Negation*. (河上誓作 (監訳) 濱本秀樹・吉村あき子・加藤泰彦 (訳), (2018), 否定の博物誌.)
- [3] 王学群, (2003), 現代日本語における否定文の研究.
- [4] 吉村あきこ, (1999), 否定極性現象.
- [5] Chafe, Wallace. L. (1994), *Discourse, consciousness, and time: the flow and displacement of conscious experience in speaking and writing*.